

## ACROSS 編集室編

『ストリートファッション 1980-  
2020——定点観測 40年の記録』  
PARCO 出版、2021 年刊  
351 頁、2800 円+税  
国際ファッション専門職大学  
直井里予

本書は、東京の3都市（渋谷、新宿、原宿）で実施された「ストリートファッションの定点観測」の結果をまとめたデータ集である。この「定点観測」は PARCO 社のシンクタンク部門であるアクロスが継続的に実施しているもので、その「観測結果」は、これまでも『東京の若者』（1989、PARCO 出版）、『ストリートファッション 1945-1995』（1995、PARCO 出版）として刊行されている。本書はその第三弾であり、1980 年から 2020 年までの、定点観測 40 年の記録がまとめられている。

構成は以下のようになっている。

- ・ 1994 年までの 1980 年～1994 年までのブーム解説の再録
- ・ 1995 年～2020 年までのストリートファッションの定点観測のデータの結果及びブームの考察
- ・ 「定点観測とは」
- ・ 「定点観測」の意味と定義
- ・ 「定点観測」の方法論
- ・ 「定点観測」からみえてくるもの、わかること

巻末には、付録として年表がついている。

定点観測のデータは約 180 名に対するインタビューにもとづく。インタビュー対象は主に 10 代後半～20 代の若者で、路上スナックを中心に、居住形式（「親と同居」など）や毎月のファッション代などのデータも加えられており、服やアイテムのブームを多面的にとらえることができる。また、データを時

系列に並べているので、ページを繰るだけで、「ファッションの変化」をビジュアルとして簡単に把握することができる。

1988 年～1991 年の「渋谷ジブーム」、1983 年～2003 年の「オリーブ少女」「フレンチカジュアル」、1990～1993 年の「スポカジ」「パラギャル」、そして、1995 年～1999 年の「コギャル」……と、流行は時代とともに変化し続けてきた。どの時代、どの年代に着目するかは、読者の年齢層によっても違ってくるだろうが、評者（1970 年代前半生まれ）と同世代ならば、本書の前半、1980 年～90 年代の東京ストリートファッションに関するデータを見れば、当時の記憶が蘇るであろう。バブル景気に DC ブランドブーム、山本耀司や三宅一生などのデザイナーが活躍し、ファッション雑誌『an・an』、渋谷 PARCO パート 2 など、メディアやストリートという場が発信する情報に人々が群がった時代である。ファッションと社会情勢を絡めて論じようとする向きなら、本書は現代史の一史料として有効活用できるかもしれない。

本書の範囲は 2020 年までであるが、末尾には、2020 年から始まった COVID-19 禍がもたらした社会変容、そしてストリートファッションが生まれるメディア空間そのものの変容についての考察が記されている。COVID-19 によってストリートからは人が（一時的に）消え、コミュニケーションはオンラインが主体になり、AR (augmented reality / 拡張現実) など新テクノロジーによるデジタルな活動空間が一挙に拡大した。VR (virtual reality / 仮想現実) の世界は、ストリートファッションにどのような影響を与えていくのだろうか（ストリート自体がバーチャルになっているかもしれないが）。東京の街がこれまで経てきた変貌と、その背景にある時代の移りかわりに想いを馳せながら、次の 40 年後、ストリートファッションがどのような展開を見せているのか、本書の続編が今から楽しみである。